

## #書評



## 臨床医にそっと寄り添い、 背中を押してくれる 「読むメンター」

評者 片岡仁美

京大医学教育・国際化推進センター  
副センター長



## 「卓越したジェネラリスト 診療」入門

複雑困難な時代を生き抜く  
臨床医のメソッド

藤沼 康樹＝著

定価：4,400 円(本体 4,000 円+税 10%)

A5・296 頁／医学書院／2024

[ISBN978-4-260-05354-9]

藤沼康樹先生のファンである。まだ先生を存じ上げなかった頃、『日本内科学会雑誌』に掲載されていた文章に感銘を受けた。その後、『総合診療』誌の編集委員としてご一緒させていただく機会が増え、いっそうファンの度合いが増している。しかし、それを差し引いても、序文を読んでいる最中から涙してしまうとは自分でも予想外であった。新幹線で席に着くや本を開いて、1 ページ目から涙ぐんでいるせわしない私を見て、隣の方も不審に思ったかもしれない。

医療はサイエンスとアートである。よく聞く言葉であるが、「本書では、サイエンスに原則があるように、アートについても、曖昧なものではなく行動原則があり、ガイドラインがあるということを、できるだけ厳密かつ明快に語っています」(本書 p.iv) と述べられている。そして、『『卓越したジェネラリスト』は、医療のサイエンスとアートを同等の価値をもつものとして取り扱います。そこにこそ、卓越したジェネラリストの最大の特徴があります」(同前) という文章を読んだ時、前述のごとく胸が熱くなってしまったのである。

一般にサイエンスに偏りがちな診療環境や交わされる会話のなかで、「患者さんを丸ごと診たい。すべてを受け止めたい」「いつでも頼れる存在でありたい」と常に希求し診療をしてきた。そのことに誇りを持っているが、一方で複雑困難事例や医学だけでは答えが出ない患者さんを多く診ていると、「これでいいのだろうか?」と時に孤独を感じることもある。自分を信じてやっているけれど、本当にこれでみんな幸せになっているのだろうか?

人には言わない、そんな素の気持ちにそっと寄り添い、「それでいいんだよ」と背中を押してもらった気持ちになった。言語化が難しいアートの側面が、見事に言語化・構造化・見える化されているだけではない。日々の名もないと思っていた取り組みが、個別の経験にとどまらず体系化されたアートを形成する一部であることが理解できた。

加えて、本書の卓越した部分は、どの部分を読んでも自身の「実践」に反映されること、また、実践からの学びを言語化・客観化・相対化するというループを実感できることである。「ああ、あの患者さんにはこうアプローチすればよかったのか」「自然に行ったことではあったけど、このような理論に基づいた妥当性があったのだ」と、実践と理論を行き来しながら深い省察を得られることが何とも心地よく、優しくあたたかい文章とも相俟って、まるで藤沼先生と語り合っているような気持ちにさえなった。医師としての経験年数が増えてくると、自身の診療を他者にフィードバックしてもらい機会が減っていく。このことが前述の孤独感にもつながっていると思うが、本書を読むことで藤沼先生の言葉をたどりながら深く自分自身とも語り合う機会になっているのだと思う。

「実は、ベテラン医師のロールモデルを見つけることが困難な時代になっている」(本書 p.261) という一節に続き、「ベテラン医師になり歳を重ねていっても、たとえ細くとも粘り強く未来に役立つよう生き抜いていきたいという思いで、本書を執筆しました」(本書 p.266) と藤沼先生は述べられている。本書の締めくくりにおいて、再度グッと心に迫る部分である。このような素晴らしい先達が背中を見せるだけでなく語りかけてくれる本書は、「卓越したジェネラリスト」をめざすわれわれにとって、いつでもページを開くことができ、勇気づけられる必携の書である。

G